

---

# その瞳に映る先に

来栖川 大輔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その瞳に映る先に

### 【Nコード】

N8387E

### 【作者名】

来栖川 大輔

### 【あらすじ】

家族旅行に出ていた伊吹家だが、突如謎の大爆発が起きる。息子である誠だけは生存したが、父、母、妹は死んでしまった。九年後、この事件を調べ、犯人を探し出そうとするが…

## 序章　すべてはここから始まった

### 序章

それは過去に起こったたった一人の少年の突然の悲劇の話。

山に車で家族旅行に出かけていたとき、ついついうたた寝をしていた時だった。

ふとした瞬間。そう、まさに刹那と呼ばれる時間といえは良いだろうか。

一瞬の閃光と急激な衝突があり、気付いたときには車は大破し、少年はアスファルトに放り出されていた。

突然のことになにが起こったのか理解できなかった。

少年は全身を激しく強打し、呆然と車や辺りを眺めていた。

家族は車の中に残されており、その車も原型を留めていなければ、人が生存できるとは思えない。

まして、辺りは火の海に包まれている。車から出る際に衝突したのが原因で、少年の意識も怪しい状況だ。

「とうさん… かあさん… あいか… ダレか…」

少年の意識が薄れてきたのか、体が心地よく眠りにつきそうになる。

「死ぬのかな…」

少年は死を覚悟した。周囲は火の海となり、逃げ道も無くなった。何故こんな事が起きたのか少年には理解できなかった。いや、理解しなくなかったのかもしれない。

なにせ目を開けたらそこは灼熱の炎につつまれ、家族もみな息絶えていたのだから。

しかし、その時奇跡が起きた。少年の耳に微かに、だけど凜とした声だったのは覚えている。

「the atmosphere : water : calm  
a scorching flame」

何を喋っているのかは分からなかったが、その声が発せられてたと同時に異変が起きた。空からの突然の突発的な大雨…いや、豪雨と言った方が適切かもしれない。炎に包まれた辺り一面にだけ降っている。

少年は意識を失う寸前だったが、確かにその目で見ていた。そして、辺り一面の炎は数分のうちに消えた。

そして、最後に少年の目に映ったのは長身で細身の長い蒼髪で瞳が紅い女が居た。

少年の無事を確認するとそのままスッと居なくなった。そして少年は意識を失ったとほぼ同時に救急車のサイレンが鳴り響いた。

この事件は全国の報道や記事にもなった。また、他国でも一面に大きく掲載するほどの大事件だった。当時の事件の被害状況等は以下の通りである。

死亡者約十七万人

行方不明者 約六万四千人

生存者…十二名

この生存者の内1人があの少年である。当時の少年は9歳。名は伊<sup>いぶ</sup>吹<sup>きまこと</sup>誠

この事件がきっかけで伊吹は近隣の大手大学病院に入院、精密検査を受け、回復後、警察の事情聴取を受けることになる。

そして…伊吹の人生を決定した出来事でもあった。

## 第二話 伊吹 誠

そこは日頃誰も近寄らない校舎の裏だった。

真夜中の校舎の裏には月明かりだけが頼りで見える場所で、蛍光らしきものはない。

月の光が当たらない所で何かが動いた。それは凝視しなければ……いや、凝視しても気付かないかもしれない。それほど細かな変化だった。しかし、細かな変化が僅かな時間をかけ大きな変化に変わった。

そう……何もない空間からソレは現れたのだ。

空間を引き裂いたかのように突然現れたのはミニスカの女……というより制服を着た黒髪の長い少女だった。

「あなたが、私を呼んだのですか……？」

消え入りそうな声だが、確かに少女は問いかけた。その端正な顔からは表情に乏しく、少し怯えたように相手を窺う。

「そうですか……では今から私のご主人様マスターですね。わたし、カリンといます。」

抑揚のない声と言うのだろうか。少女の声は消え入りそうで儚い感じがする。

「ではご主人様マスター。ご存知と思いますが契約を結んで頂けないでしょうか？」

まるで少女の中でお決まりの定例文の如く契約の詳細を話してくる。以前にも何度も契約をしたことがあるのだろう。とても分かりやすく、機械的だった。

「ではご主人様マスター、契約が完了いたしました。これによりご主人様マスターと契約のため今後は一緒に同行させていただきます。」

「ああ。」

契約自体は一瞬で済んでしまった。お互いの額を合わせシンクロしただけ。しかし、この契約でカリンとの意識の共有が出来るようになった。

「カリンだったな。俺のことはマスターなどと呼ばないように。下の名前で呼んでくれ。」

一瞬カリンは何故？と疑問を浮かべたような顔つきをした。

「学校でマスターなどと呼ばれると変に思われる。下の名前で呼んでくれ。」

「…わかりました。誠様…いえ、誠さん」

相変わらずの抑揚のない声で聞き取りにくい声だった。

そして、その言葉を最後に二人は消えた。まるで一面の風景に溶けるようにゆっくりと消えた。

それは戌の下刻だった。

## 第二話 伊吹 誠（後書き）

かなり長い間事情があつて放置してましたが心機一転頑張りますので宜しく願います。

今回の章は物語の布石で書きました。特に進展も何もありません（汗）



### 第三話 女帝 神風琴音

2009年4月6日 場所 夕風学園 8:00

グラウンドに円形の人だかりが出来ていた。

およそ200人はいるだろうか。異様なまでの殺気をだしながら円形の中心に立っている一人の美女を見つめていた。

美女の名前は神風<sup>かなざき</sup>琴音<sup>ことね</sup>。一番の特徴は187cmという女性にしては身長が高いと言うところと身長に比例した豊満な胸（一部の人間はこれが目的であつまっていた）

と神風家に伝わる真紅の長剣：緋<sup>ひ</sup>歐<sup>おう</sup>だ。

この緋欧は琴音とほぼ同等の長さであり、学園内で現存する剣の中では最長である。

「神風くくくたばれえやあ。」

緊迫した空気が張り詰める中、一人の男が動き出した。それに便乗するように200人の男が神風に向かっていく。

神風はこの状況でも焦りの一つもない。なぜならコレは日常茶飯事に起きる出来事であり、神風はいつも一撃でこの状況を打破している。

そう…つまりコレはお決まりの死亡フラグなのだ。

毎日繰り返されるこの作業。もちろん琴音も好きでこんな状況を作っているわけではない。そもその発端の原因はこの学園の会長にある。

ある日、会長が校内放送をつかい宣言した。

「午前8時に2年の神風を倒したものには嫁にしてヨシ。」

…などと言う意味不明な宣言をされた時、私は偶然お茶を飲んでいただけだが、そのお茶も漫画の世界みたいに盛大に吹いてしまった。今はまだ良くなったほうだ。宣言の次の日の8時は学園の男子ほぼ全員が集まってかかって来たのだ。あれは身の毛もよだつ体験だった。…なんていうことは無くその時も一瞬で勝負は着いていた。そして、今日も。

「グラビテーション 緋歐：1の陣」

神風の詠唱と謳歌の一振りで半径数10mの地面が神風の周りだけを除いてどす黒く変色し、その刹那、世界が反転したかのような凄まじい衝撃音が遅れて学園中に響いた。そして辺り一面に群がる死体。…ではなく、加減していたので全員気絶しただけだった。

「いや、毎度の事ながらお見事。」

「…会長ですか。」

後ろで手を叩きながら琴音に近づいてきた。何時ものところだから琴音はそのやり取りにウンザリした様に話しかけた。

「そろそろこんな事止めにしませんか？無意味ですし。」

「そうかい？この光景は見てても飽きないよ。」

琴音は後ろを見ると先程倒した男子生徒たちの屍（死んでない）がどんどん片付けられていく。学園の掃除屋とも言われている《スカイキーパー》の連中だ。

彼等の特徴はきわめてシンプルに尽きる。

全身黒で覆われていて額にSKの文字。

これだけだった。だが逆を言えば…

それだけしかない。

何しろ彼等の出現は最近神風が男子生徒達を倒す際に倒れておる学生を介抱する為毎日のように見るが、彼等の目的や人数、隠れ場所等一切が分かっていない。この学園の七不思議の一つに上がっている程だ。もつとも会長と何か繋がりがあるのは見え見えなのだが。

「これ以上は無意味でしょう？今日で終わりにさせてください。」

「そうだねえ…今日で丁度10日だっけ。」

勿体つけるように会長は考えている。いや、これは…

考えている振りをしているだけ。それは露骨で誰にでも分かるような仕草だった。

「じゃあ、明日で最後にしよう。」

ほら来た。どうせ悪巧みを考えてるんだろう。神風は冷静に対処する。

「明日も今日みたいな事を？結果は変わらないと思いますが？」

そう。この10日間そうだった。如何に大人数でかかって来ようとも神風の剣技で全てねじ伏せていた。学園で彼女に敵う物は居ず、何時しか女帝<の称号を持つまでになった。

会長もそんな事は百も承知で言っている筈。一体何をしようというのか。

「そうだねえ。でも明日はどうかな？」

「…何が言いたいのですか？」

会長の言いたい事が全く理解できない。まさか…

「会長が相手になるとでも？」

「僕が??まさか…。だって」

如何にも会長は心外だと言わんばかりに言い放つ。

君とじゃあ相手にもならないよ？

凄まじい殺気に神風は恐怖した。彼女が女帝なら会長は>皇帝と言える。この学園では最も強いものが会長の座を手に入れることができる。

会長になると2つの特権が与えられるらしい。

一つは絶対宣言。これは校内放送で使われるのだが会長自身がある宣言をし、条件が満たされれば必ず実行される絶対特権。（噂ではこれに逆らうとスカイキーパーの登場とか…）

もう一つは不明。これは会長自身にしか知らされていない特権らしい。

そんな会長だからか、殺気一つだけで相手を殺せるのではないかと神風は思う。もっとも表面上だけは冷静さを保とうと努力していた。

「…では誰が？」

辛うじて短く言うとう会長は殺気を消した。

「明日は僕が連れてくる。一人。」

「一人？誰ですか？」

神風の言葉を聞いて会長は薄ら笑いを浮かべながら答えた。

「今年入学した1年生の伊吹って奴だよ。彼とは既に話をつけてあるから。」

そう答えると会長はじゃあまたねと去っていった。

「伊吹…？」

聞いたこともない名前だった。しかし相手が誰であれ負けるわけにはいかない。

「明日で終わる…終わらせる。」

神風は拳を握り締め、堅く決意したかのように空を見上げた。

そう。明日の朝8時で最後の戦いになるのだから。一人でも容赦は

しない。

何故ならそれは会長の使者だからだ。

時間は8時10分を指す手前だった。

## 第四話 決戦日前日 伊吹誠

2009年4月6日 場所 夕凧学園屋上 13:00

午前の授業が終わり、学生の貴重な休憩時間に突入した。

4月とはいえまだ肌寒いのか、いつもなら屋上で昼食を食べる学生も多いのだが、今日は居なかった。

そんな中、一人昼食も食べずに遠い景色を眺める男子学生が居た。

伊吹<sup>いぶき</sup> 誠<sup>まこと</sup>である。

「カリン、どうだった？」

誰も居ない屋上での独り言：のはずが

刹那の瞬間に、まるで今まで私初めからココに居ましたよ？的なオラを出しているんじゃないかとさえ感じさせるかのように誠の左隣に居た。

「ごめんなさい…まだはつきりとは。」

「そうか。」

大して期待していなかったのか。誠は背伸びしながら答えていた。

「でも…間違いなくあの人はずなんです。」

証拠はないが確信はある。と言った感じでカリンは小さな声で答える。

「そつだな…俺もそう思う。」

だが証拠がない。

うなだれるように誠が呟く。

「カリン。分かっているとは思うが…。」

「ええ。分かっています。…もう時間が無いのですよね。」

「…そうだ。」

九年前のあの事件以来、誠は全てを失ったといってもいい。最愛の家族を失い、友人や知人は全員未だ行方不明になっている。今まで誠は天涯孤独に生きてきた。その誠が今まで誰にも言わず、忍ばせたたった一つの執念。

あの事件の黒幕を探して殺す。

政府は、自然災害であると報告しているが、被災者である誠からみればこれは明らかな人災であった。（ただ、9年経った今でも事件の原因は掴めていない）

誠はこの9年間、ある魔術師の下で鍛錬していた。しかし魔術師が言うには、誠には魔術としての才能があまりなく、使える魔術もわずかに二つだけ。

一つ目は、自身又は物理的なものの一時的強化。戦闘では唯一使える基本スキルだが持続硬化時間がわずかに数十秒程度。とてもではないが使える能力とはいえない。

二つ目、は未来予知。といっても数年後の未来を予測したりとかではなく、現在の状況から脳内で高精度演算を行い、その未来を読み取るといった仕組み。

もう少し分かりやすく捕らえてみよう。歩いている一般人が居ます。当然右足、左足と交互に足は出ます。右足が前に出てその次の行動を読み取る…これが基本的な未来予知である。

しかしこの二つは他の魔術師にはほとんど修得しないものである。なぜなら

強化の効果時間の短さと予知に関する脳内の負担とそのリスクが高いため。

強化も未来予知も個人差があるものの、持続時間が圧倒的に短いた

め魔術師同士での戦闘になるとそれは邪魔な能力でしかない。予知に関しては、効果平均時間はわずかに数秒先の先読み程度しかない。なぜ師匠がこの能力しか教えてくれなかったのだろうか、誠は今でも師匠のことが理解できなかった。

当然独学でも勉強しようとはした。しかし魔術の独学は非常に危険であり、師匠にも禁止されていた。

「（よく、ぶつ殺すって言われてたっけなあ）」

「…？」

何か寂しそうに空を眺める誠をどうしたものかとカリンは誠を見ていた。誠はそんなことなど知らぬ顔して聞いてみた（勿論内心では気付いているが）

「なあカリン…聞いてもいいかな？」

「…なんでしょうか？」

一呼吸して落ち着いてから、誠は本題を振った。

「俺は…勝てると思うか？」

カリンはわずかに示唆するが

「それは、どちらとですか？」

「決まっているだろう。」

誠はカリンの方に振り向いて答える。その時日の光が反射して少し眩しかった。

「会長とだよ。」

カリンにはどう答えていいのか迷っていたところ、正直に答えてと誠は言った。それなら…。

「正直、誠さんに勝ち目はありません…。」

やっぱりか。と誠は薄笑いしながらカリンに背を向ける。

「あの人を遠くから見ましたが凄まじい殺気でした。多分、私も気付かれています…。」

カリンは霊体のため、通常は他人に認知されない筈だ。その彼女に



気付かれている？

ありえない。

会長が如何に人外の能力があるうとも彼女はこの世に存在して居ない霊体なのだ。

誠でさえカリンが声を発しなければ、居場所さえ分からないというのに、会長は気付いている？

「カリン一つ聞きたい。もし俺が神風と組めばどうだ？」

背を向けているので表情こそ見えないものの、少し苛立ちの声を出した。

「ひこきめ鼻屑目に見ても…勝てないと思います。」

神風はこの学園で2番目に強いとされる>女帝くだというのにそれでも勝てないと言う。

それほど会長との力の差が歴然なのか。

「カリン。なら、俺と神風とではどうだ？」

「私の力を使っても勝てるかどうか…です。」

つまり良くて5分、悪くて3〜4と言ったところらしい。

「ならば、神風に勝って同盟し、仲間を増やすのが得策か。」

神風と組んでも勝ち目が薄いのなら、人数を増やすしかない。単純な考えだが最も効率がよく、勝つ確率も上がる。

「カリン行くぞ。神風と交渉してみる。」

カリンは黙って誠の後ろに憑いてった。誠の目指す先がどれだけ困難であるか、カリンは一番分かっていた。

それはまるで死に行く傷ついた戦士を思い浮かべるようだった。

その時、休憩時間が終わりを告げるチャイムが鳴った。



#### 第四話 決戦日前日 伊吹誠（後書き）

今回で新単語がどんどん出ています。

誤字、脱字、句読点、ストリー上おかしいぞ？等変なところがあれば教えてもらえると幸いです。

## 第五話 決戦前日 会長の思惑

2009年4月6日 夕凧学園 生徒会室 14:00

「これより特別緊急会議をする。」

緊迫した声が走る。会議の参加者は5名。

会長を初め、副会長や会計、書記、生徒会担当顧問の5人だ。

「会長。今回の議題を聞いていないのですが…」

緊迫したムードの中、副会長が伺う。

「…単刀直入に言おう。例の計画に支障が出る可能性が出た。」

その言葉が出た途端、全員に緊張が走った。そんな中副会長は冷静に疑問を述べる。

「会長。神風の問題ですか？確かに彼女の实力は相当のもの。しかし、会長からみれば対した障害にもならない筈ですが。」

「…その通りだ。しかし今回は彼女の時とは次元が違う。」

「…まさか会長。見つかったとでも？」

「そう。生き残りが見つかった。」

その瞬間生徒会室の空気がより一層重くなった。普段軽々しい会長も嫌な空気を発している程だ。

「で、誰なんですか？会長。」

「伊吹誠だ。今年入学してきた奴だ。」

「伊吹…何故彼だと？」

全員が分からないと言った感じで問う。会長は少し呆れたようなしぐさをして

「何故だと？お前たちは伊吹誠の入学時のデータを見たのか？」

「はさ…」と数枚の紙が役員の手元に来る。その紙を見ても会長の思惑が分からない。

一見するとその紙は普通の履歴書と同等程度のデータでしかない。

一体コレが何だというのだろうか。

「会長、まさか……」

突然立ち上がり、副会長はそこまで言うと、有り得ないだろうと自問自答していた。

「……いえ、なんでもありません。」

「……？」

どうも副会長は何か心当たりがあるらしいが、何か突拍子も無いことのように、ここは黙って引き下がった。

「で、会長。どうします？」

「……ん？どうするとは？」

顧問の発言に会長は思わず聞き返してしまった。まさかとは思うがコイツ……

「だから」

どうやって殺すのかと聞いてるんです。

やはりコイツは使えない。この顧問は思考があまりにも短絡過ぎるところが駄目なのだ。ソレが出来るのなら、とつくに殺っていると言つのに。

「まだ殺せない。しばらくは様子見だ。」

「何故ですか？あの時の生き残りでしょう？今処分しなければ大変なことに……」

「勘違いするな。これは命令だ。」

一瞬で凄みを効かせて顧問を黙らせた。確かに事情を話せばいいのだが、この顧問にはそこまでの信用と実績がない。逆にコイツに話せば相手側にどう影響するかもわからない。

「……もう時間が無いから話は以上だ。今日はもう解散しろ。話はまた後日連絡する。」

相変わらずの凄みで各役員を急いで退散させる。……副会長を除い

て。

「会長。まさかとは思いますが。」

全員が帰ったのを確認し、数秒時間を置いてから話し出す。

「…副会長の思っている事で正解だ。」

全て分かっている。もう話さなくてもいいと言わんばかりに、投げやりに話を切る。

つまりはイラついているのだ。先程の顧問とのやり取りに…。

「では会長。最後に一つだけ。何か障害があるのですね？」

副会長は言葉を選んで会長に話をする。当然だ。これで何故殺さないのかと聞いている顧問の二の舞：いや、虫以下だろう。

「ああ。一つだけ厄介な存在がな。」

会長は一瞬だけ躊躇ったが、副会長との信頼は厚いのか、話し始めた。

「伊吹誠にはな…代神<sup>カミシロ</sup>が憑<sup>カミシロ</sup>いてるんだ。」

「なんですって!!」

冷静沈着な副会長が、声を荒げて会長に尋ねる。無理もない。

代神とは古くから神々の使いとされ、崇められ、恐れられていた存在である。

現在では世界国際機関で認定された少数の魔法使いにしか代神は居ない。

代神はそもそも魔術師との契約で結ばれた相棒<sup>パートナー</sup>であり、魔術師の能力の強化や弱点の補助、戦闘の前衛として使役される聖霊<sup>せいれい</sup>である。会長は以前に代神と一度だけ戦ったことがあるが、結果は惨敗だった。剣術、魔力共に桁外れだった。そんな会長だからカリンを見て（実際は霊体だが、会長の魔力で見えていた）理解したのだろうか…

あの女は以前あった代神と同じ雰囲気<sup>雰囲気</sup>を纏っていた。

伊吹誠自身<sup>スペック</sup>に対した能力が無くても彼女が前衛で来れば状況はこ

こちら側が圧倒的に不利になってしまふ。というよりも。

そもそも相手にならない一方的な戦いでしかない。

会長の恐れている最悪に事態がまさしくそれだ。迂闊に手を出せない。最悪の事態だけは避けなければいけない。だが、伊吹誠を生かしては当面の計画に支障が出る可能性があるもの確かだ。

「俺は一度戦ったことがあるのはお前も見ただ。」

「……ええ。私も正直、代神がアレほどとは思いませんでした。」

副会長の辛辣な顔が、まるで先程まで代神と戦っていたかのような思わせぶりだったが、事実間違いでもない。

会長はつい1ヶ月前まで戦っていたのだ。副会長も前衛で居たが、ものの数秒で気絶という結果。事の顛末は会長から聞いた次第だ。お互い言わなくても分かっているだろう。数刻後、副会長は黙って部屋を出た。

会長はこの件については様子見で保留にした。しかしその結果が伊吹誠に幸運を運んだ。

実際はカリンにそこまでの能力はない。彼女の能力は＜増幅＞にある。

伊吹誠が闘い、カリンが誠の能力を増幅させて戦うのだが、これには大きな弱点がある。

1対1でしかこの能力は活かされない点である。

集団で来られると完全にアウトだ。カリンが狙われると負けだし、霊体化してしまえば誠に増幅が出来なくなる弱点があるが、当然会長には知らない。

会長側からしてみればこの判断は大きな間違いだった。もし、すぐ誠と対峙していたらあっさり会長が勝っていただろう。それほど戦

力差があつたのだ。この時、絶対的な優位を持っていた会長側は僅かにではあるが、形勢が均衡状態になるかのように少し誠側に傾きだした。

しかし、まだ会長の勝利は堅い。如何にカリンの能力が不明でも対峙してしまえばそれまで。

おそらくその瞬間会長なら見極められる。その為の明日の神風との試合を組んだのだ。

誠からしてみればこれはまだまだ不利な状況だ。カリンの能力が完全に把握されたとき、誠が死ぬときなのだから…。

そして、運命の朝がやってきた。



## 第五話 決戦前日 会長の思惑（後書き）

最近仕事が忙しく更新出来ていない状況です（言い訳）  
長い話になると思いますのでまったり見てやってくださいませ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8387e/>

---

その瞳に映る先に

2011年1月1日02時08分発行